

# 令和四年度入学試験問題

## 国 語 (人文学部・教育学部・経済科学部・医学部・創生学部)

### 注意事項

- 一 この問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはならない。
- 二 問題冊子は、全部で二十一ページある。(冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつた場合は申し出ること。)問題冊子の中に下書き用紙が一枚入っている。
- 三 受験する学部によって選択する問題が異なるので、左の表を見て、○印で指定された問題を解答すること。なお、問題ごとに学部の別が記してある。

問題(ページ)	学 部	人文学部	教育学部	経済科学部	医学部	創生学部
第一問(一～八ページ)		○	○	○	○	○
第二問(九～十二ページ)		○	○			
第三問(十三～十四ページ)		○	○			
第四問(十五～二十一ページ)				○	○	○

- 四 解答用紙は、問題冊子とは別になっている。人文学部・教育学部は三枚、経済科学部・医学部・創生学部は二枚である。解答は、すべて解答用紙の指定された箇所に記入すること。
- 五 受験番号は、各解答用紙の指定された二箇所に必ず記入すること。
- 六 解答時間は、九十分である。
- 七 問題冊子及び下書き用紙は、持ち帰ること。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私たちは、どういうわけか、自由な社会で自由を享受することに疲れ始めている。不自由は苦しいが、自由も苦しい。自由でありたいのだが、自由すぎるのも辛いのだ。このことの原因を具体的に描写してみよう。

まず、自由と自己実現。自由に生きることは、自分の人生を自分で決めて生きていくことを意味する。ところが、そこで選択した生き方の責任は自分にしかないのだから、たとえ不幸な人生になったとしても、それは自らの能力や努力が不足しているせいだ、ということになる。

世界にはアクティヴに行動する有能な人びとがいるだろう。彼らはタイタを撥ね退けて、自己実現を追い求める。主任の次は課長、課長の次は部長、部長の次は役員。自らに与えられた自由をコウシ<sup>②</sup>することで、可能な限りその能力を拡張していき、自由を自己実現の糧にしていける人たちである。

メディアやSNSを通じて、一生懸命頑張っている人、充実した生を送っている人、新しい分野で成功した人の情報はつねに入ってくる。情報が全体化することで、「地元で一番」では満足できなくなり、インターネットで検索すれば、自分と同じ年齢なのにすごい人がいくらでも見つかる時代になった。ここで、そうはなれない自分に疲れるのである。生まれたときに自由のチケットを一方的に渡してきて、それを死ぬまでに使い切ることを要求する社会が嫌になるのだ。

つぎに、自由と多様性。自由は多様性を保障する。現代社会では感受性や考え方の違いに積極的な価値が認められており、生の実実はさまざまに形作られる。それだけではなく、誰もが自分を表現することができるように、サイバースペースでは、自己表現のためのプラットフォームが無数に整備されている。(ついでに言っておけば、「いいね!」と承認する機能もついている。) 表現の自由は多様性をカシカ<sup>③</sup>するのである。(お洒落なインスタグラム。)

ところが、多様性が過度に強調されると、これは裏返って命法になる。あなたは自分なりの感受性や考え方を形成して、それを表現しなければならなくなるのだ。それは、多くの場合、他者とのキョウゴウ<sup>④</sup>になるだろう。多様性は差異によって作られていくが、他者との差異を確立できない凡庸な人間は、生き方の多様性から置いてけぼりにされた気がする。世界から取り残された気がする(SNS疲れ)。

最後に、自由と自己固有性。自由には「本当の自分」という観念がつきまとう。前提になるのは、自分が何をやりたいたいのかを知ることができて、意志と決断によって方向性を決められる主体的人間像である。逆に言えば、欲望の状況をうまくつかめない人間には、そもそも自由になるための根本条件が欠けている、ということにならないだろうか。

ヴィジョンのはつきりした強い憧れを持つ者にとって、自己固有性は一つの自我理想になりうるのかもしれない。しかし、何をしたいのかがよく分からず、欲望が不活性になっている状態(メランコリー)にとって、自己固有性という概念は端的に重すぎる。あるいは、こうも言えるかもしれない。ポストモダン以後の時代に生まれた者にとって、「自己固有性」はすでに肌感覚に合わなくなっている、と。むしろ、平野啓一郎のいう「分人」(dividual)の方が、私たちの自己イメージにはフィットしているように思われる。「他者を必要としない『本当の自分』というのは、人間を隔離する檻<sup>おぼ</sup>である」(平野啓一郎『私とは何か——「個人」から「分人」へ』講談社現代新書、二〇一二年、九十八頁。強調は省略)。

これらが、自由であることに疲労を覚える人間の心情である。しかしながら、私の見るところ、最も本質的な問題は、自由の概念が相対主義に結びついていることである。自己実現、多様性、自己固有性のキーワードは、じつはそれ自体が直接、自由であることの疲労を生みはしない。自由が相対主義的に解釈されて、これを一人で処理しようとするとき、そこに義務としての自由、という逆説が現われるのだ。

というのも、そのとき自由は、生誕と同時に(私)に背負わされた重荷にほかならず、自由であることの責任を自分自身で引き受けるほかないからである。その結果、他者との断絶や社会からのソガイ<sup>⑤</sup>を感じる。ついでに言っておけば、私は自由に付着する相対主義のイメージを、ポストモダン思想の負の遺産と考えている。

とはいえ、これは哲学全体の問題でもある。とりわけ、近代哲学が提起した自我のイメージを引き継いだ実存哲学は、自由であることの価値を積極的に語ってきたが、その語りは社会の一般性から離れた特別な実存意識だけを評価し、自由の資格を例外的な実存者にのみ与えてきたのではないだろうか。

たしかに、実存と自由が結びつくのにはそれなりの理由がある。近代社会が新しく獲得した自由の精神が世界の超越項(宗教や共同体の物語)を徐々に解体し始めたとき、実存哲学は、まさに自由を起点にして、人間の生きる意味を建て直す必要に迫られたのである。さらに言えば、他者とは共有できない何かを心に抱え込んでしまうとき、(私)はどう生きるか(実存)が深刻な問いになるので、自由の極北が社会の一般性から外れてしまうということも、分からなくもない。

そうして、自由は自己意識、自己価値、自己固有性の概念と重ねられることになる。超越性が失われた時代のニヒリズム(存在不安や絶望)を克服して、自己の本来的な可能性を追求するためには、主体的な意志と決断が不可欠である。自らの力によって生の意味をつかむことのできる者だけが、真に自由でありうる。実存哲学はこのように考えたのである。

しかし、その問題点は、はつきりしている。実存哲学においては、自由な実存者以外はみな程度の劣った平々凡々たる生を送る者にすぎない。いやむしろ、初めに一般性への軽蔑や憎悪があつて、それから一般性の範疇はんちゆうには収まらない実存の存在論的優位が独断的に措定そていされている、と言った方がいいのかもしれない。

だから、ほとんどの実存哲学には、凡庸と卓越の二分法が存在している。真の実存者でありたいなら、凡庸な世界解釈をひっくり返すだけの能力を持たねばならない。すると、社会の一般性から逸脱することが、自由を享受するための条件になるだろう。こうして、人間の実存は孤立した自由の表象に結びつき、自由であることが強制されるという逆説的な事態になってしまうのである。

真の自由を発揮するのか、それとも自由を飼ひ殺しにするのか——この二者タクイツ⑥は、もう時代遅れになりつつある。それどころか、自由という概念は、現代の実存意識にとってあまり中心的な役割を果たしていないようにさえ見える。自由を享受することに伴う疲労が、それほどまでにチクセキ⑦しているのかもしれない。あるいは、この社会で自由はすでに確実すぎる前提に

なっていて、(私には理解できない)つぎのフェイズに実存意識が進んでいるのかもしれない。

ここで、自由への疲労は自由のザセツ形態<sup>⑧</sup>である、と言ってしまうと、これは自由を享受できている人間のマッチョな言い分にすぎない。一切を自由の弁証法に回収する態度は、さらなる疲労を呼ぶだけである。一人ひとりが抱える切実な生きがたさを高次の自由の前段階として片づけることに、私はあまり意味を見出さない。疲れた人間は「幸福」を求める。以下ではひとまず、自由と幸福の関係から考えてみよう。

自由がそのつどの規定性を超えていく運動だとしたら、幸福は欲望が充足して安定している一時的な状態である。幸福の本質は、欲望が充たされて安定した状態(あるいは逆に、欲望そのものにとらわれることのない安定した状態)が絶対的かつ永続的に持続するという一つの理念としても現われるだろう。これは生の究極目標にさえなりうる理想である。だが、理念としての幸福は、私たちが暮らしのなかで感じる具体的な幸福の状態をその理念化の源泉として持つのであって、幸福のアイデアが現実の幸福を上から規定するわけではない。

欲望が充たされていることが幸福の条件だとすれば、自由への欲望が充足した場合にも、私たちは幸せを感じることができ。しかし、自由とは何か。アレクサンドル・コジエーヴのヘーゲル解釈にしたがえば、自由には自己価値への欲望と他者による承認の契機が含まれる。そのため——最終的には相互承認の段階に至るにしても——自由を実現していくプロセスでは、他者との相克関係を避けることができない。「人間的欲望は他者の欲望に向かわねばならない」(アレクサンドル・コジエーヴ『ヘーゲル読解入門——『精神現象学』を読む』上妻精／今野雅方訳、国文社、一九八七年、十四頁。強調は省略)が、「自己意識の『起源』について語ること、これは、必然的に『承認』を目指した生死を賭しての闘争について語ることになるのである」(同書、十六頁。強調は省略)。

〈私〉は他者に〈私〉の価値を認めさせたい。すると、〈私〉は他者の欲望を欲望することになる。というのも、〈私〉が代表している価値が、同時に他者の求める価値と一致するときに、〈私〉の自己価値は他者によって認められて、自由への欲望は充たされる

からである。すなわち、〈私〉が欲している価値は他者もまた欲している価値であると、他者に認めさせようとするのだ。

しかし、他者も自立した主体として同じようにふるまうため、複数ある承認への欲望は、必然的に、相互的かつ関係的なものとなり、そこに「承認をめぐる闘争」が生まれる。つまり、欲望の対象は単に実在的なものではなく、社会的関係がその価値を認めるものになり、全体としては、社会で広く認められている価値（一般価値）を目指す承認のゲームになるのである。

そして、他者からの承認を得るためには、他者の存在を完全に否定し抹消してはならない。というのも、他者が自らの意志で〈私〉の価値を承認しなければ、〈私〉の欲望は満たされないからである。無理矢理承認をキョウウウウしても、自己価値にはつながらない、ということだ。だから、最終的には互いの自由を認めあう「相互承認」の段階に至るほかない。これがコジエーヴのヘーゲル解釈を通して見えてくる自由の弁証法の全体像である。

ところが、疲れた人間は、このような相克関係に入っていく気力を持たない。まさに自己と他者のあいだで行なわれる承認のプロセス（闘争、承認、そして、配慮）そのものに嫌気がさしているからである。そういう面倒なプロセスはなるべく避けたいと思うだろう。端的に言えば、他者とかかわるのは疲れてしまうので、必要以上に人間関係を扱げたくないし、まして自己価値を認めさせるために他者と争う気はありません、ということである。

一見すると無気力で自己中心的な考えだが、そのとき、他者の自由を侵害するつもりもなく、それはそれとして認めていることに注意すべきである。〈私〉には〈私〉の生き方が、あなたにはあなたの生き方がある。互いにカンシヨウせず、邪魔をしないように生きていきましょう、というわけだ。私は、無理にコミュニケーションや関係性を押しつけない、こうした風通しのよい態度が個人的には好きだが（正確には、学生と接しているうちに好きになったのだが）、ここで承認と黙認は紙一重になっているようにも思われる。もしかしたら、そこに疲れた人間が時折感じるさみしさの一因があるのかもしれない。

（岩内章太郎『普遍性をつくる哲学——「幸福」と「自由」をいかに守るか』による）

(注)

SNS —— ソーシャル・ネットワーク・サービスの略で、登録された利用者同士が交流できるウェブサイトの会員制サービスのこと。フェイスブック(Facebook)、ツイッター(Twitter)、インスタグラム(Instagram)など。

プラットフォーム —— ネットワーク上で様々なサービスを提供する環境。

命法 —— 命令のこと。

ポストモダン —— 芸術や思想の領域で、近代主義を超えようとする傾向。

相対主義 —— 一切の真理や価値を相対的と考える立場。

実存哲学 —— 人間の普遍的本質ではなく個の実存を哲学の中心におく哲学的立場。

措定 —— 肯定的に主張すること。

弁証法 —— 意見と反対意見との対立を通じて、より高い段階の認識に至る哲学的方法。

アイデア —— 物事の本質、理念。

問一 傍線部①、⑩のカタカナを漢字に改めよ。

問二 傍線部A「SNS疲れ」とあるが、これはどういうことか。SNSの利点と対比しながら、本文に即して九十字以内で説明せよ。

問三 傍線部B「自由であることが強制される」という逆説的な事態」とは、どのような事態か。本文に即して百字以内で説明せよ。

問四 傍線部C「私」は他者の欲望を欲望することになる」とあるが、それはなぜか。本文に即して六十字以内で説明せよ。

問五 傍線部D「承認と黙認は紙一重になっている」とあるが、どのような点で「紙一重」と言えるのか。「承認」と「黙認」の内容を明らかにしながら、本文に即して百字以内で説明せよ。

第二問 次の文章は江戸時代に編まれた見聞・逸話集の一節である。読んで後の問いに答えよ。

神楽岡かぐらおかの南に住める源みなもと龍りゆうといふ人、博学にして仕へを求めず。家のほとりに藤袴ふぢばかま多く生おひたりければ、世の人は是を蘭園の隠士とぞ呼びける。此の人管弦の道に妙にして、とりわき琴きんのことをよく弾きしかば、其の頃名高き伶官れいくわん皆親しく交はりて、音律を論じけるに、並ぶ者さらになかりしとかや。明和五年の春の頃、大和国法隆寺に什物じふもつを出して、諸人に見する事の有りしに、其の中に高麗の国より、上宮太子じやうぐうたいしに奉りしといふ琴のこことありけるを、もとより好める道なれば、見まほしくて彼の寺に至りしに、さまざまの宝でもある中に、彼の琴のここの聞きしより見るは勝りければ、愛めで惑まどひて、かたへなる僧に、琴の形写かさまほしき由よしを言ふに、「よかんなり」とあれば、懐なつにまうけたる墨・筆・竹尺たかばかりなど取り出して、あたりあたりばかり写すほどに、黄なる衣着たる僧の寄り来て、「こはなぞ、まさなし」と咎とがむ。はじめ傍らの僧の許せし由を言へども聞きも入れず。御堂の傍らに将あて行きて、かへすがへす「ただ此の願Aひによりて、京よりふりはへ詣まで来て侍れば、たとへ障さる事ありとも、枉まげて願ひのまま写させ給ひてよ」と、手をすり額ぬかをさへつきて、よろづに請こへども聞かず。事ある由にて出で去りぬ。なほさて止やまむこと口をしくて、ある人に此の僧の坊を問ふに「弥勒院に」と教ふ。

さて行きて徒者とも語らひて、さまざまに言はずれど、応こたへもなし。とかうするほどに日も暮れぬ。いはむかたなく侘わしきまBまに、畳紙たたみ取り出して、

とにかくにひきわづらひつ七筋の琴の緒Bよりも強つよきところを

と書き付けて、「明日参Aりなむ」とて差し置きて帰りぬ。早朝つとめて行きたれば、有りつる僧出で逢ひて、「きのふまで、さばかりの御志とも知らでいなび申しつること、いかにひたふるなりと思おぼし貶おとさせ給ひてむ。恥はづかしさよ。いざ給へ。方丈にて見せ参らせむ」とて伴ひ行き、彼の琴取り下ろして見するに、あまりの嬉うれしさに胸打ち騒さわぐばかりなれば、やうやう心を鎮めて見るに、其

の形常にあらず。上みな黒く塗りたり。おもてはことごとく断紋有りて、牛の毛の如くなるあり。また、其の間に梅の花弁はなびらのやうなるもの、三つ二つづつ現れて、五つあるも希まれに見ゆ。是をなむ牛毛断、梅花断イとは言ふめる。およそ断紋さまさまある中にも、分きて梅花断は昔よりきはめて古き琴のしるしにて、ありがたき宝とするとかや。さて、裏上頭うらうへかしらより尾に至るまでの、大きさ、広さなどことごとく写し取り、己が家に歸りてのち、自らよき材を選びて、其の式により数面造り出して世に伝へけり。

(松井成教筆写『落粟物語』による)

(注)

源竜——鈴木蘭園(1741、1790)という医師。

琴のこと——「きん」と読む場合の「琴」は中国に由来する通常七弦の古楽器を指し、江戸時代当時の日本において文人に好まれ、その形状、奏法の復元が試みられていた。また「こと」は、この場合弦楽器全般を指す言葉。

伶官——音楽のことを司る官吏。

什物——長年所蔵されている宝物。

上宮太子に奉りしといふ琴のこと——「聖徳太子に贈られたと言われる七弦琴」の意。実際には、琴の裏に、唐時代開元十二年(724)、中国で造られたと記されている。

断紋——琴の表面に塗った漆が自然に裂けて出来た文様。通常の漆器には生じず、琴の発する音を受け続け五百年以上を経た古い琴にのみ生じる、として珍重された。

問一 二重傍線部A「参りなむ」、イ「言ふめる」を、例にならつて文法的に説明せよ。

〔例〕「論じける」

論じ(サ行変格活用動詞「論ず」の連用形)・ける(過去の助動詞「けり」の連体形)

問二 傍線部A「此の願ひ」とは何か。本文に即して具体的に説明せよ。

問三 傍線部B「とにかくにひきわづらひつ七筋の琴の緒よりも強きところを」の和歌について、「ひきわづらひつ」の部分に用いられている技巧に注意しながら、その内容を、八十字以内で述べよ。

問四 傍線部C「いかにひたぶるなりと思し貶させ給ひてむ」を、本文に即して現代語訳せよ。

問五 傍線部D「自らよき材を選びて、其の式により数面造り出して世に伝へけり」とあるが、源竜がこのような行為をなした理由は何か。本文全体から推量し、三十字以内で説明せよ。

第三問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(設問の関係で、返り点・送りがなを省いたところがある。)

鄭五<sup>ハ</sup>不知<sup>ク</sup>何許<sup>ノ</sup>人。携<sup>ヘ</sup>母妻<sup>ヲ</sup>流<sup>シ</sup>寓<sup>シ</sup>河間<sup>ニ</sup>。以<sup>テ</sup>木工<sup>ヲ</sup>自給<sup>ス</sup>。病<sup>ミ</sup>将<sup>ニ</sup>死<sup>セント</sup>、嘱<sup>ニ</sup>

其<sup>ノ</sup>妻<sup>ニ</sup>曰<sup>ハク</sup>、「我<sup>①</sup>本<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>立<sup>テ</sup>錐<sup>ノ</sup>地<sup>モ</sup>。汝<sup>モ</sup>又<sup>ケレバ</sup>拙<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>女<sup>ノ</sup>紅<sup>ニ</sup>。度<sup>ハカル</sup>老<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>必<sup>ズ</sup>以<sup>テ</sup>凍<sup>トウ</sup>餒<sup>ダイ</sup>一

死<sup>セン</sup>上<sup>コトヲ</sup>。今<sup>ア</sup>与<sup>レ</sup>汝<sup>ヲ</sup>約<sup>ス</sup>。有<sup>ニ</sup>能<sup>ク</sup>為<sup>レ</sup>我<sup>ヲ</sup>養<sup>フ</sup>母<sup>者</sup>、汝<sup>チ</sup>即<sup>チ</sup>嫁<sup>セヨ</sup>之<sup>ニ</sup>。我<sup>シテ</sup>死<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>恨<sup>ミ</sup>也<sup>ト</sup>。」妻<sup>クシ</sup>如<sup>レ</sup>

所<sup>ノ</sup>約<sup>スル</sup>、母<sup>カ</sup>藉<sup>リ</sup>以<sup>テ</sup>存<sup>ス</sup>活<sup>ス</sup>。或<sup>イハ</sup>奉<sup>シテ</sup>事<sup>ス</sup>。稍<sup>レバ</sup>怠<sup>レ</sup>、則<sup>チ</sup>室<sup>中</sup>有<sup>リ</sup>声<sup>、</sup>如<sup>ク</sup>碎<sup>レ</sup>磁<sup>折</sup>竹<sup>。</sup>一

歳<sup>ム</sup>棉<sup>衣</sup>未<sup>ダ</sup>成<sup>ラ</sup>、母<sup>キ</sup>泣<sup>キ</sup>号<sup>レ</sup>寒<sup>シト</sup>、<sup>③</sup>忽<sup>チ</sup>大<sup>ク</sup>声<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>鐘<sup>鼓</sup>、<sup>②</sup>殷<sup>ク</sup>動<sup>ス</sup>牆<sup>壁</sup>。如<sup>ク</sup>是<sup>者</sup>七

八<sup>ニシテ</sup>年<sup>、</sup>母<sup>死</sup>後<sup>、</sup>乃<sup>チ</sup>寂<sup>ク</sup>。

(紀昀『閱微草堂筆記』より)

(注)

鄭五——人名。

木工——大工。

立錐地——錐きりの先を立てるほど狭い土地。

女紅——裁縫や機織りなどの女性の手仕事。

凍餒——凍えたり飢えたりすること。生活に困窮すること。

殷動——震動させる。

問一 傍線部①②③の読みを、送り仮名の必要なものはそれも含めて、ひらがなで答えよ。

問二 傍線部ア「与レ汝約」、イ「如ニ碎レ磁折レ竹」を、ひらがなのみを用いて書き下し文に改めよ。

問三 波線部A「不知何許人」を現代語訳せよ。

問四 波線部B「有ニ能為レ我養レ母者」を現代語訳せよ。

問五 二重傍線部C「寂」とはどのような状態か。なぜそのようなようになったのか、それまでの経緯を踏まえて具体的に説明せよ。

第四問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

二〇二〇年春、突然私たちの身に降りかかってきたコロナ禍は、あらためて共同体型組織の弱点をさらけ出した。その一つが新型コロナウイルスへの感染防止のため、いわば「緊急避難」的に導入されたテレワークである。

東京商工会議所が第一次緊急事態宣言後の二〇二〇年五月二十九日～六月五日に実施した調査によると、六七・三%の企業がテレワークを導入しており、宣言前の三月の二六・〇%から大きく増加している。とくに従業員三〇〇人以上の企業では導入率が九〇・〇%に達した。

ところが日本ではテレワークの導入によって、生産性が低下したという企業が少なくない。日米の労働者それぞれ約一〇〇〇人を対象にしたある調査(注1)によると、アメリカでは回答者の七七%が在宅勤務移行後もそれまでと同等またはそれ以上に生産性が上がったと答えているのに対し、日本では「在宅勤務は生産性が下がる」という回答が四三%で「生産性が上がる」という回答(二二%)を大きく上回っている。

とくに対照的なのはコミュニケーションへの影響であり、「以前よりコミュニケーションが取りにくい」という回答がアメリカでは一四%なのに対し、日本では五五%を占め、いかに対面的なコミュニケーションに依存した働き方をしているかを物語る。生産性低下と並んで注目されるようになった問題に、いわゆる「リモート・ハラスメント」(リモハラ)。「テレワーク・ハラスメント」ともいふことがある。

コロナ禍のもとで在宅勤務を経験した人を対象として行われた調査(注2)によると、「業務時間外にメールや電話等への対応を要求された」(二一・一%)、「就業時間中に上司から過度な監視を受けた(常にパソコンの前にいるかチェックされる、頻回に進捗報告を求める等)」(二三・八%)、「オンライン飲み会への参加を強制された」(七・四%)といった回答がかなりの割合にの

ぼっている。

これらの事実からうかがえるのは、日本企業特有の共同体型組織がテレワークによる働き方の効率化、合理化を妨げていることだ。

そもそも共同体の論理とコロナの対策は根本的に相容れない、いわば水と油のようなものだ。なぜなら共同体は人が溶け込むこと、ひつつくことを求めるのに対し、コロナ対策の基本は人を分けること、離すことだからである。

もう少し具体的にいうと、日本の組織や集団は「閉鎖的」「同質的」「個人の未分化」という三つの特徴を備えており、それがメンバーへの同調圧力につながっている。ところが情報ネットワークは組織や集団の壁を容易に越え、無際限に広がる。当然、そこには異質な人も参加してくる。それどころかむしろ異質な知識、技術、立場の人がつながってこそ新しい価値が生まれる。つまりテレワークの時代には、従来の同質性を基本にしたチームから、異質性を基本にしたチームへと切り替えなければならないのだ。

そしてメンバーが物理的に離れたところで働く以上、一人ひとりが仕事を分担しなければ仕事が進まないし、管理もできない。さらに共同体の中に自然とできる序列も無意味になる。ネットの世界ではフラットな関係の中で仕事をするのが基本だからである。

テレワークの影響は、仕事の領域だけにとどまらない。

テレワークを行っている二〇〜五九歳の男女正社員に対して行われた調査によると、四分の一以上の人が「私は、孤立しているように思う」(二八・八%)、「私には仲間がいない」(二五・四%)と答えている。しかも容易に想像がつくように、テレワークの頻度が高くなるほど孤独感も強くなっている(注3)。

また「コロナうつ」という言葉も生まれるなど、メンタル面に不調をきたす人も増えてきた(注4)。

かつて「会社人間」と揶揄されたように日本人サラリーマンには、地域のコミュニティや趣味の会、ボランティア団体などに所

属し、活動している人が少ない。会社という共同体へ一元的に帰属しているため、テレワークで会社との結びつきが弱くなる  
と、孤立しやすいのである。

物理的にはテレワークが普及すると自宅の仕事ができるだけでなく、居住地の制約からも逃れられる。長年続いた東京一極集  
中、地方から大都市へという人口移動の方向が逆転し、人口の分散化や過疎対策が進むのではないかと期待されている。

社員の働き方を原則テレワークにして、全国どこでも働けるようにする会社も登場した。また人材派遣のパソナグループが本  
社機能の一部を兵庫県の淡路島へ移転し、大半の社員を異動させると発表して話題になるなど、会社ぐるみで地方へ移転する動  
きも出てきている。

地方に移住すれば通勤地獄や都会の喧噪けんそうから解放され、自然に恵まれた環境の中で働ける。休日には家族で釣りやサイクリン  
グに出かけたり、友人たちとバーベキューを楽しんだり……。そんなバラ色の夢を抱いて地方暮らしを始める人が増えてきた。

ところが実際には、そのような夢が断たれるケースが少なくない。

地方への定住促進プロジェクトに関わる人たちによると、せつかくイターンなどの形で移住しても、比較的短期間のうちに都  
会へ戻ってしまうケースが後を絶たないそうだ。主な理由は、仕事上の不都合や生活の不便さなどより、地域の風土に溶け込め  
ないことだという。

地方では人びとがその地域に定住しており、幼稚園や小学校から大人になるまで一緒というように人間関係が固定化されてい  
る。堅牢けんろうな共同体がそこに築かれているのである。したがって大人も子どもも、外からやってきて仲間の輪に入るのは容易では  
ない。

そのいつばうで、定住する以上は地域の一員としての役割を果たすことが求められる。多くの地域では若者の流出が進み、地  
域の担い手不足に頭を痛めている。そのため移住者にも地域のみまざまな役割が割り当てられ、休日のたびに会合や催しに駆り  
立てられる。しかも休日に家族でレジャーを楽しんだり、旅行に出かけたりする文化が根づいていないので、周囲から奇異な目  
で見られることもある。

要するに人の流動性が低い地域では、共同体への全面的な帰属が期待され、異質な生活様式に対する許容度が低い傾向がある。

このようにテレワーク浸透の前には、職場と地域の両方で厚い共同体の壁が立ちはだかっているのである。

ただ、ここでも見過ごせないのは、合理性を超越した共同体主義の影響である。その点に注目してみよう。

日本企業で働いた経験のある外国人が異口同音に語ることがある。「日本人は会社にいることが仕事だと思っ**て**いる」というのだ。

それは「帰りにくさ」「休みにくさ」にもつながる。

日本では正社員の労働時間が主要国の中で突出して長い状態が続いており、その主な原因は残業の多さである。そこで正社員六〇〇〇人を対象に行われた調査(注5)の結果をみると、残業時間を増やしていた要因のトップは「周りの人が働いていると帰りにくい雰囲気」だった。

また有給休暇もヨーロッパではほぼ一〇〇%取得されているが、日本では長年五〇%程度で推移している。有給休暇を残す理由について尋ねた調査(注6)では、「休むと職場の他の人に迷惑をかけるから」(六〇・二%)、「職場の周囲の人が取らないので年休が取りにくいから」(四二・二%)、「上司がいい顔をしないから」(三三・三%)という回答が上位に入っている。

そして仕事の成果よりも出勤していること、会社にいることに重きを置く風土はコロナ禍でまた厄介な問題を露見させた。多くの経営者が言うには、営業などテレワークができる部署に対する、製造などテレワークができない部署からのやっかみ、不公平感がとても強いそうだ。ある会社ではやむなく営業のスタッフ全員を雇用から業務委託に切り替えたという。

この問題の根はとても深い。なぜなら、効率性の論理と共同体の論理が正面からぶつかっているからである。

単純な経済学の論理からいえば、報酬は貢献への、あるいは提供した労働力への対価である。しかし共同体の論理に照らせば、共同体の一員としてどれだけ苦労したか、犠牲を払ったかに応じて報われるべきだという理屈になる。閉鎖的な共同体の中

は、だれかが得をするとだれかが損をする「ゼロサム」構造になっている。したがって公平を期すためには、大きな負担をした人ほど報われなければならないのである。

たとえば同じ仕事でも定時にやり終えて帰る人より、時間をかけて残業した人のほうが多くの収入を得るのは不合理なようだが、それだけ自由時間を犠牲にしたと思えば周囲は納得する。しかも実際に後者のほうを評価する管理職は少なくない。また業務上の必要があるか否かにかかわらず一律に転勤させるのも、転勤や長時間残業を受け入れてきた総合職を一般職より高い地位まで昇進させるのも、建前はともかく本音としては負担の不公平を感じさせないためという理由が背景にある。

要するに日本の職場では効率性の論理と共同体の論理が渾然一体となっており、それが問題を複雑にする。一貫した論理の欠如がしばしばご都合主義や、恣意的な人事を招くことになる。そしてテレワークの普及や雇用形態の見直しなど、働き方改革も中途半端なものにとどめてしまう。

なお、国や地方自治体なども広い意味では共同体型組織である。したがって、そこでもしばしば成果より負担や犠牲が重視される。

いわゆる公務員バッシングはその典型である。たとえば役所の職員が定時に退庁し、休暇をめぐればいっばい取得したり、良好な環境で快適に働いていたりすると住民からクレームがくることがあるという。そのため非効率だとわかっていても夏場に冷房をつけず、薄暗い中で残業をするような光景がみられる。

総理が自粛期間中に会食をしただけで責任を追究されるし、逆に「汗をかく」とか、「自ら身を切る」といえば多くの国民・住民は納得する。総理といえども同じ共同体の一員であるかぎり、一般国民と同じように共同体の規範、共同体の論理に従うことを最優先させられる。何を成し遂げたかは二の次なのだ。

また、かつてオリンピック出場選手が出発に際し、「楽しんでできます」と挨拶しバッシングされたことがあったのを覚えている人もいるだろう。国から支援を受け、国の代表として参加する以上は「楽しむ」なんてもつてのほかで、精一杯がんばる姿を示さなければならぬ。五輪生活をエンジョイする姿をさらしながら金メダルを獲<sup>と</sup>っても世間の批判は避けられないが、死力を尽く

して敗退したらその姿は賞賛される。そういう光景を私たちはどれだけ目にしてきたことか。

共同体の論理が支配し続ける以上、組織や社会の改革は必ずといってよいほど暗礁に乗り上げることがを覚悟しなければならぬ。

(太田肇『同調圧力の正体』による)

(注1) コンピュータ・ソフト会社のアドビが二〇二〇年に行った「COVID-19禍における生産性と在宅勤務に関する調査」

(注2) 東京大学医学系研究科精神保健学分野「新型コロナウイルス感染症に関わる全国労働者オンライン調査」二〇二〇年二月三日公開

(注3) パーソル総合研究所「テレワークにおける不安感・孤独感に関する定量調査」二〇二〇年三月実施

(注4) 国立成育医療研究センターが二〇二〇年一月～二月に実施した「コロナ×こどもアンケート」第四回調査によると、小学四～六年生の一五%、中学生の二四%、高校生の三〇%に中等度以上のうつ症状がみられた。

(注5) パーソル総合研究所・中原淳「長時間労働に関する実態調査」二〇一七年実施

(注6) 労働政策研究・研修機構「年次有給休暇の取得に関する調査」二〇一〇年(複数回答)

問一 傍線部A「緊急避難」的に導入されたテレワークは日本企業で働く従業員に何をもたらしたか、本文に即して百字以内で説明せよ。

問二 傍線部B「日本企業特有の共同体型組織がテレワークによる働き方の効率化、合理化を妨げている」とあるが、テレワークによる働き方の効率化や合理化を実現するためには、どのようなことが必要だと著者は考えているか、七十字以内で説明せよ。

問三 傍線部C「テレワーク浸透の前には、職場と地域の両方で厚い共同体の壁が立ちはだかっている」とあるが、著者の考える「職場共同体の壁」と「地域共同体の壁」とはどのようなものか、百三十字以内で説明せよ。

問四 傍線部D「日本の職場では効率性の論理と共同体の論理が渾然一体となっており、それが問題を複雑にする」とはどういうことか、本文に即して百五十字以内で説明せよ。

令和4年度新潟大学個別学力検査（前期日程）

# 問題訂正

問題 国語

（人文学部・教育学部・経済科学部・医学部・創生学部受験者用）

〇1ページ 第二問 本文の右から二行目

（誤） ← （正）  
辛<sub>い</sub> | 辛<sub>い</sub> |